

ポラスグループ  
5回目の阿波踊り慰問

## 被災仮設住宅に ひとときの贈りもの



集会所前の広場で住民も一緒に  
輪になって踊った

「ヤットサー、ヤットヤット」。今月10日、宮城県名取市閑上港朝市に、笛や太鼓の音色とともに、威勢の良いかけ声が響いた。色とりどりの浴衣をきた踊り手達が賑やかに踊り始めると、次々と人が集まってきた。この阿波踊りグループは南越谷阿波踊り振興会所属の16の連から成り、東日本大震災の被災地である同地にボランティアで慰問に訪れた約70人の有志たちだ。

南越谷阿波踊りはポラスグループ（埼玉県越谷市、中内晃次郎代

表）のサポートにより30年以上続く日本三大阿波踊りの一つ。慰問はポラスグループが同市内の美田園第一仮設住宅を建設したことをきっかけに始まった。2012年4月の第1回から数えて5回目となる。今回は仮設住宅での踊りに加え閑上朝市でも披露。仮設住宅では午前と午後の2回行った。

慰問ツアーを率いた同振興会・PO連の土屋誠連長（住宅資材センター・施工部部长）は仮設住宅での慰問の前に「引きこもりがちな住民の方も多し。そうした人た

ちに外に出てきてもらえるように、思い切りやろう」とメンバーに呼びかけた。その思いが通じ、鳴り物が住宅地に響くと、あちこちの住戸から住民が顔をのぞかせ、外に出てきた。最後には住民も一緒になって踊り、多くの人の笑顔がこぼれるひと時となった。

同仮設住宅（全128戸）には現在98世帯が居住しているが、市内の仮設住宅の統廃合等により世帯数は近く増える予定。ポラスグループでは仮設住宅のメンテナンスを定期的実施しており、住民たちとの交流が続いている。同住宅地の高橋善夫自治会長は「一番心配なのは住民の住む家が決まっていないこと。住宅の建設が十分には進んでいない」と訴えた。復興住宅への入居は抽選で決まることから、これまでのコミュニティが壊れることが、高齢の住民には負担になる。仮設住宅で生活する人たちの復興はほど遠い。

慰問の前日、ツアー参加者たちは、自身も被災した「閑上語り部」の案内により、津波で亡くなった人たちの慰霊碑に花を手向け手を合わせた。